

# 学校質問紙調査による学校の類型化

早稲田大学人間科学学術院 野嶋栄一郎

福井大学教育地域科学部 岸 俊行

## 1. はじめに

全国学力・学習状況調査により、全国の児童・生徒の学力の傾向を把握することは可能となった。しかし、子どもたちの学力は子どもたちの属する学校の方針と切り離して考えることはできない。各学校の教育方針が子どもたちの学力形成に影響を与えている。換言すれば、学校の教育方針を中心とする経営方略のタイプによって子どもたちの学力が規定されるといえる。この学校の経営方略に関しては、全国学力・学習状況調査において行われた各学校の校長先生を対象にした学校質問紙調査によって知ることが可能である。

本研究では、学校の経営方略が子どもの学力に影響を与えているという考えにたち、全国の小中学校を学校質問紙調査の結果をもとに類型化し、類型化と学力の関係および類型の検証と意味づけを面接調査をもとに行うことを目的とする。

## 2. 計画

本研究では平成 20 年度の学校質問紙調査の結果を分析対象とした。分析にあたっては、小学校、中学校それぞれ独立に分析を行い、結果を得た。分析は以下の三つのフェーズで行った。1. 学校質問紙調査の結果に基づく類型化, 2. 類型化された学校群と学力との関連の検討, 3. 各学校群（クラスタ）の意味づけの検討

### 2.1 学校質問紙調査の結果に基づく類型化

学校質問紙調査の質問項目を 15 の質問群に分類し、質問群ごとに回答の数値化を行った（3 章で詳述）。質問群ごとに数値化されたデータをもとに、k-means 法による非階層的クラスタアナリシスを行った。

### 2.2 類型化された学校群と学力との関連の検討

類型化された学校群ごとに、学力調査の結果を集計し、群ごとの比較を行った。

### 2.3 各学校群（クラスタ）の特徴の検討

各学校群（クラスタ）の特徴を明らかにするため、各クラスタを代表している学校をサンプリングし、面接調査を行った。サンプリングに際しては、非階層的クラスタアナリシスによって類型化された学校群の重心を求め、その重心に近い学校から各群 20 校を抽出し、その 20 校の中から、群ごとに面接可能な学校を 4 校サンプリングした。

## 3. 方法

### 3.1 学校質問紙調査票の構成および変数の選択

学校質問紙調査は、小学校に対する調査票は 1～97 までの計 97 問で構成されている。また、中学校に対する調査票は、小学校の質問項目から算数、国語の教科担任制に関する項目（回答番号 57,62）を除いた 95 問で構成されている。

分析で使用する変数は、以下の手順で選択した。小学校、中学校の調査票共に、回答番号 1～10 およ

び 14～16 は学校の規模（教師数や児童生徒の割合）に関する回答項目である。また、17～19 の回答項目は、PC 等の設置状況に関する項目である。更に回答番号 96（中学校調査票では回答番号 94）は校長の勤務年数を問う項目である。上記の 17 項目の回答項目は学校の取り組みに対する評価に直接関係のある項目ではなく、また、回答項目からの数値化に適さないために本分析から除外した。以上より、本調査で使用する変数は、97 の回答項目（中学校調査票は 95 の回答項目）のうち上記を除外した 80 の回答項目（中学校調査票は 78 の回答項目）を用いた。

### 3.2 回答項目の分類

本分析で用いる 80 の回答項目（中学校は 78）を、その内容から下記の 15 の質問群に分類を行った。

1. 学習態度（3 項目、回答番号 11～13）
2. 図書学習（3 項目、回答番号 20～22）
3. 学習支援状況（3 項目、回答番号 23～25）
4. 日常生活学習指導（7 項目、回答番号 26～32）
5. ICT 利用（国語の指導）（3 項目、回答番号 33～35）
6. ICT 利用（算数の指導）（3 項目、回答番号 36～38）
7. 学力調査の利用（5 項目、回答番号 39～43）
8. 習熟度別少人数学習（7 項目、回答番号 44～50）
9. 授業方略（12 項目、回答番号 51～62；中学校、10 項目、回答番号 51～60）
10. 特別支援教育（2 項目、回答番号 63～64；中学校、2 項目、回答番号 61～62）
11. 地域のサポート（5 項目、回答番号 65～69；中学校、5 項目、回答番号 63～67）
12. 家庭学習（12 項目、回答番号 70～81；中学校、12 項目、回答番号 68～79）
13. 情報公開・連絡（5 項目、回答番号 82～86；中学校、5 項目、回答番号 80～84）
14. 教員研修・連携（8 項目、回答番号 87～94；中学校、8 項目、回答番号 85～92）
15. 校長（2 項目、回答番号 95, 97；中学校、2 項目、回答番号 93, 95）

### 3.3 回答の得点化

本分析で用いる 80 の学校回答項目は名義尺度または順序尺度である。そこで、各質問項目の回答を次のように変換を行った。順序尺度は、それぞれの質問項目の内容に関して数値の大きい方が質問項目の内容を反映しているように、値を変換した。変換した値をそのまま得点とした。また、名義尺度は二値データ（1,0）として得点化した。上記の質問群ごとにその合計点を算出した。

### 3.4 検討ケースの選定

小学校 21865 校、中学校 10639 校の中から、本分析の対象となるケースの選定を行った。ケースの選定に際しては、下記の 3 つの基準を用いた。

- (1) 本分析で用いる 80 の回答項目（中学校では 78 の回答項目）、1 項目以上不備のあった学校は分析から除外した。
- (2) 本研究は学校の取り組みをもとに学校の類型化を試みることと共に、その類型化された学校と学力テストとの関連の検討を行うことも目的の一つである、そのため、学力テスト（国語 A、国語 B、数学 A、数学 B）を 1 人も受験していない学校は、分析から除外した。
- (3) 本調査で使用する質問項目の中に、習熟度別少人数学習（回答番号 44～50）に関する項目がある。これらの質問は習熟度別の指導や少人数による指導の実施に関して各学校の対応を聞いた質

問である。そのため、これらの質問項目は、ある程度の児童生徒数がいて意味をなす質問項目といえる。そこで本調査では、第6学年（中学校の場合第三学年）の児童生徒数が10人以下の学校を分析から除外した。

上記（1）～（3）の学校を分析から除外し（除外学校数、小学校；4014校 中学校；1451校）、本分析においては小学校 17851校、中学校 9188校を分析の対象とした。

## 4. 結果（類型化）

### 4.1 各質問群の概要

小学校、中学校ごとに、3.2の質問群ごとに得点の合計を求めた（表1参照）。

質問群	小学校(N=17851)				中学校(N=9188)			
	最小値	最大値	平均値	標準偏差	最小値	最大値	平均値	標準偏差
学習態度(3項目)	0	9	6.35	1.484	0	9	6.55	1.59
図書学習(3項目)	0	3	2.11	0.765	0	3	1.72	0.83
学習支援状況(3項目)	0	3	0.931	0.797	0	3	1.41	0.79
日常生活学習指導(7項目)	3	21	16.28	2.65	7	21	16.3	2.62
ICT利用(国語の指導)(3項目)	0	9	2.35	1.88	0	9	1.14	1.49
ICT利用(算数の指導)(3項目)	0	9	1.75	1.76	0	9	0.98	1.37
学力調査の利用(5項目)	0	5	3.83	1.24	0	5	3.56	1.37
習熟度別少人数学習(7項目)	0	19	4.85	4.48	0	19	4.19	4.71
授業方略(小;12, 中;10項目)	2	32	20.06	3.88	0	30	19.91	3.62
特別支援教育(2項目)	0	6	4.31	1.01	0	6	3.96	1.14
地域のサポート(5項目)	1	13	7.19	2.19	0	13	6.41	2.06
家庭学習(12項目)	2	36	28.99	4.79	0	36	25.63	5.09
情報公開連絡(4項目)	2	9	6.3	0.99	1	9	5.51	1.18
教員研修連携(10項目)	3	24	18.79	2.99	1	24	16.57	3.15
校長(2項目)	0	6	4.29	1.02	0	6	3.99	1.07

### 4.2 非階層的クラスタ分析（K-means法）を用いた学校の類型化

#### 4.2.1 クラスタ数の決定

上記15の質問群の得点を標準化得点に変換し、非階層的クラスタ分析を行った。クラスタ数を決定するため、小学校のデータを用いて3クラスタ～8クラスタを指定して実行し、それぞれの群の特徴を上記の15の質問群および学力調査の結果から検討した結果、4クラスタにおいて、ケースの明確な選別が可能であると判断した。次に中学校のデータを用いて同様の分析を行ったところ、4クラスタにてケースの明確な選別が可能であると判断した。小学校と同様の分析を行うことを考慮し、分析を行った。

#### 4.2.2 小学校の類型化

小学校をクラスタアナリシスを用いて4つの群に分類した。各群の概要は表2の通りである。弁別された4つの群の特徴に関して、15の質問群の標準化得点から検討を行った。各群の質問群の概要および平均値の分布は下記の表3・図1の通りである。

表2 各群のケースの概要(小学校)

群	度数	国公私			地域規模				学級数規模						
		国立	公立	私立	大都市	中核市	その他の市	町村	無回答	-5	6-	12-	18-	24-	30-
1	3548	18	3514	16	728	403	1909	472	4	60	1356	1228	633	226	41
2	6058	22	6007	29	918	633	3471	984	5	115	2660	1886	998	340	54
3	3515	19	3487	9	756	432	1822	476	5	65	1408	1113	623	249	52
4	4730	14	4701	15	981	497	2488	731	9	69	1857	1573	891	261	70
合計	17851	73	17709	69	3383	1965	9690	2663	23	309	7281	5800	3145	1076	217

表3 各群ごとの質問群の概要(小学校)

	1群		2群		3群		4群	
	平均	標準偏差	平均	標準偏差	平均	標準偏差	平均	標準偏差
学習態度(3項目)	0.683	0.900	0.169	0.908	-0.223	0.824	-0.563	0.931
図書学習(3項目)	0.342	0.872	0.004	0.971	0.175	0.925	-0.391	1.047
学習支援状況(3項目)	0.267	0.996	0.067	1.002	0.036	0.981	-0.312	0.934
日常生活学習指導(7項目)	0.969	0.649	0.287	0.761	-0.261	0.747	-0.900	0.796
ICT利用(国語の指導)(3項目)	0.569	0.952	-0.553	0.633	0.985	0.817	-0.450	0.725
ICT利用(算数の指導)(3項目)	0.548	1.038	-0.536	0.529	1.016	0.936	-0.479	0.606
学力調査の利用(5項目)	0.436	0.712	0.044	0.950	0.223	0.831	-0.549	1.114
習熟度別少人数学習(7項目)	0.486	1.087	-0.256	0.888	0.294	1.002	-0.256	0.862
授業方略(小;12, 中;10項目)	1.023	0.802	0.117	0.799	-0.094	0.715	-0.847	0.753
特別支援教育(2項目)	0.630	0.923	0.113	0.923	-0.132	0.876	-0.519	0.938
地域のサポート(5項目)	0.803	0.929	-0.111	0.896	0.131	0.867	-0.559	0.846
家庭学習(12項目)	0.845	0.596	0.360	0.713	-0.277	0.868	-0.889	0.864
情報公開連絡(4項目)	0.317	0.933	-0.024	0.992	0.104	0.963	-0.284	1.004
教員研修連携(10項目)	0.917	0.639	0.222	0.814	-0.187	0.838	-0.834	0.826
校長(2項目)	0.532	0.921	0.007	0.970	-0.025	0.921	-0.389	0.970

上記15の質問群の得点を従属変数とした分散分析を行った。分散分析の結果、全ての質問群において、群ごとの平均に1%水準で有意な差が見られた(表4)。また、最小有意差における多重比較の結果、学習支援状況得点の2群⇔3群、習熟度別少人数学習得点の2群⇔4群、校長得点の2群⇔3群以外の全ての群間において1%水準で有意差が見られた。

各群の特徴として、1群はICT利用(国語の指導)、ICT利用(算数の指導)を除いた質問項目において、他の群よりも高い得点を示している。反対に4群は国語の指導、算数の指導を除いた質問項目において、一番低い結果であった。

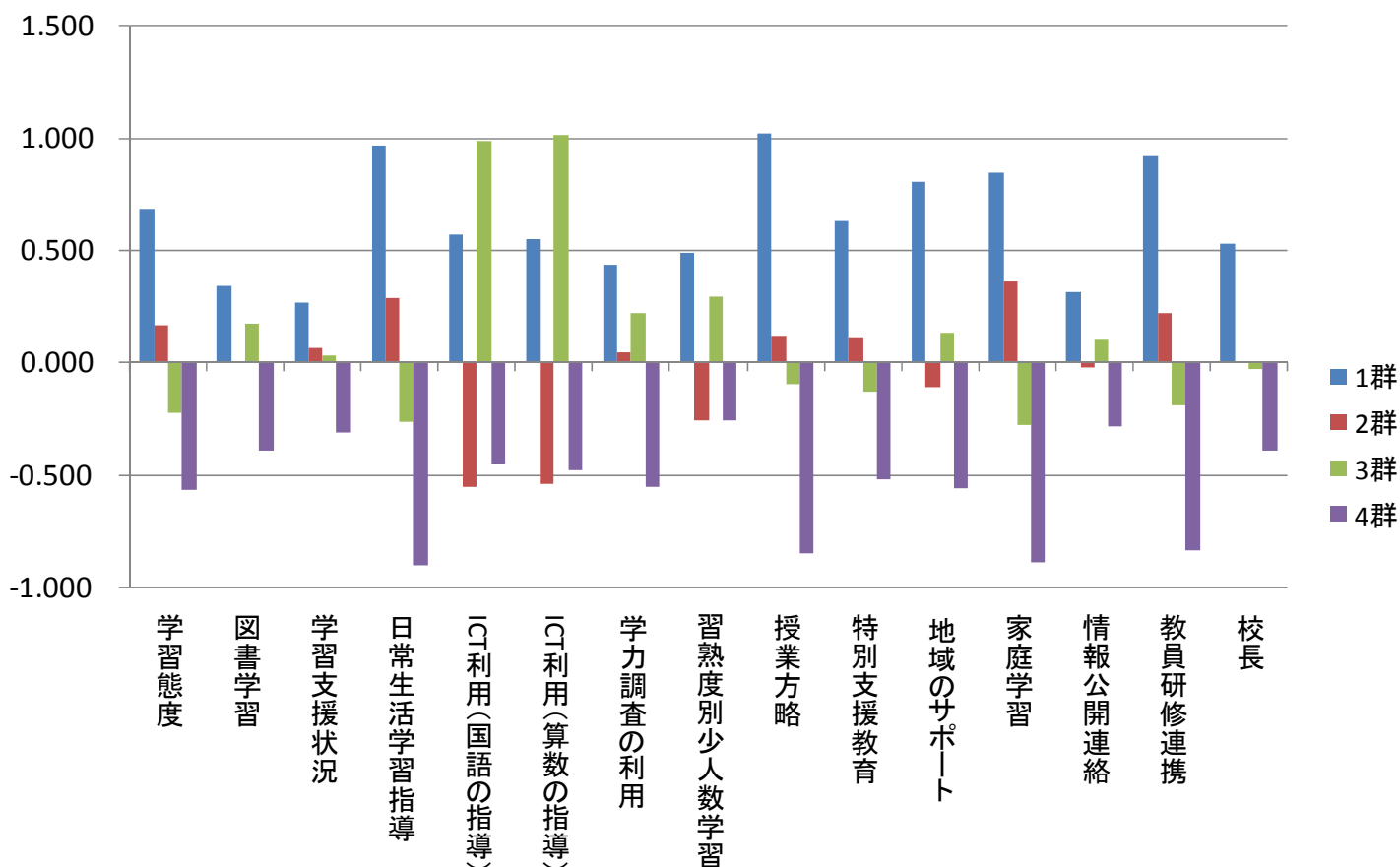


図1 各質問群の群平均

質問群	結果
学習態度(3項目)	F(3,17847)=1451.10, p<.001
図書学習(3項目)	F(3,17847)=446.01, p<.001
学習支援状況(3項目)	F(3,17847)=258.84, p<.001
日常生活学習指導(7項目)	F(3,17847)=4716.92, p<.001
国語の指導(3項目)	F(3,17847)=4190.21, p<.001
算数の指導(3項目)	F(3,17847)=4328.03, p<.001
学力調査の利用(5項目)	F(3,17847)=874.98, p<.001
習熟度別少人数学習(7項目)	F(3,17847)=687.02, p<.001
授業方略(12項目)	F(3,17847)=4043.44, p<.001
特別支援教育(2項目)	F(3,17847)=1116.01, p<.001
地域のサポート(5項目)	F(3,17847)=1662.96, p<.001
家庭学習(12項目)	F(3,17847)=4140.80, p<.001
情報公開連絡(4項目)	F(3,17847)=271.04, p<.001
教員研修連携(10項目)	F(3,17847)=3567.14, p<.001
校長(2項目)	F(3,17847)=634.97, p<.001

### 4.2.3 中学校の類型化

中学校をクラスターアナリシスを用いて4つの群に分類した。各群の概要は下記の表5の通りである。

群	度数	国公私			地域規模				学級数規模									
		国立	公立	私立	大都市	中核市	その他の市	町村	無回答	-2	-5	-8	-11	-14	-17	-20	-23	24-
1	2756	25	2677	54	412	305	1497	439	4	2	521	543	513	480	355	188	92	58
2	2210	21	2000	189	341	182	1046	412	1	7	452	462	433	378	244	127	73	33
3	1346	26	1276	44	196	121	709	232	2	3	283	281	287	239	134	78	24	15
4	2876	2	2855	19	564	326	1507	453	3	3	431	533	587	584	378	213	104	40
合計	9188	74	8808	306	1513	934	4759	1536	10	15	1687	1819	1820	1681	1111	606	293	146

弁別された4つの群の特徴に関して、15の質問群の標準化得点から検討を行った。各群の質問群の概要および平均値の分布は下記の表6・図2の通りである。

	1群		2群		3群		4群	
	平均	標準偏差	平均	標準偏差	平均	標準偏差	平均	標準偏差
学習態度(3項目)	0.387	0.857	0.395	0.737	0.255	0.856	-0.794	0.898
図書学習(3項目)	0.332	0.951	-0.259	0.942	0.366	0.933	-0.291	0.967
学習支援状況(3項目)	0.213	0.912	-0.019	1.055	0.169	0.973	-0.268	0.986
日常生活学習指導(7項目)	0.588	0.791	0.214	0.745	0.407	0.846	-0.918	0.741
ICT利用(国語の指導)(3項目)	-0.210	0.674	-0.302	0.689	1.564	1.101	-0.298	0.694
ICT利用(算数の指導)(3項目)	-0.235	0.621	-0.307	0.639	1.631	1.138	-0.302	0.666
学力調査の利用(5項目)	0.424	0.730	-0.489	1.072	0.421	0.784	-0.227	1.012
習熟度別少人数学習(7項目)	0.093	1.029	-0.224	0.882	0.537	1.110	-0.168	0.892
授業方略(小;12, 中;10項目)	0.484	0.883	0.009	0.856	0.507	0.933	-0.708	0.795
特別支援教育(2項目)	0.461	0.885	-0.297	0.991	0.284	0.934	-0.347	0.924
地域のサポート(5項目)	0.426	0.949	-0.455	0.869	0.532	0.929	-0.308	0.888
家庭学習(12項目)	0.464	0.874	0.093	0.853	0.456	0.927	-0.729	0.812
情報公開連絡(4項目)	0.352	0.881	-0.682	0.931	0.229	0.935	0.079	0.932
教員研修連携(10項目)	0.714	0.786	-0.368	0.838	0.424	0.901	-0.600	0.804
校長(2項目)	0.420	0.921	-0.385	0.958	0.241	0.949	-0.220	0.947

上記15の質問項目の得点を従属変数とした分散分析を行った。分散分析の結果、全ての質問群において、群ごとの平均に1%水準で有意な差が見られた(表7参照)。また、最小有意差における多重比較の結果、学習態度得点の1群⇔2群、図書学習得点の1群⇔3群、2群⇔4群、学習支援状況得点の1群⇔3群、国語の指導得点の2群⇔4群、数学の指導得点の2群⇔4群、学力調査の利用得点の1群⇔3群、習熟度別少人数学習得点の2群⇔4群、授業方略得点の1群⇔3群、特別支援教育得点の2群⇔4群、家庭学習得点の1群⇔3群以外の全ての群間において1%水準で有意差が見られた。

各群の特徴として、1群と3群は、国語の指導、数学の指導を除いた質問項目において、すべて平均を上回る得点を示している。2群は、学習態度、日常生活学習指導、授業方略、家庭学習を除いた質問項目において、すべて平均を下回る得点を示している。

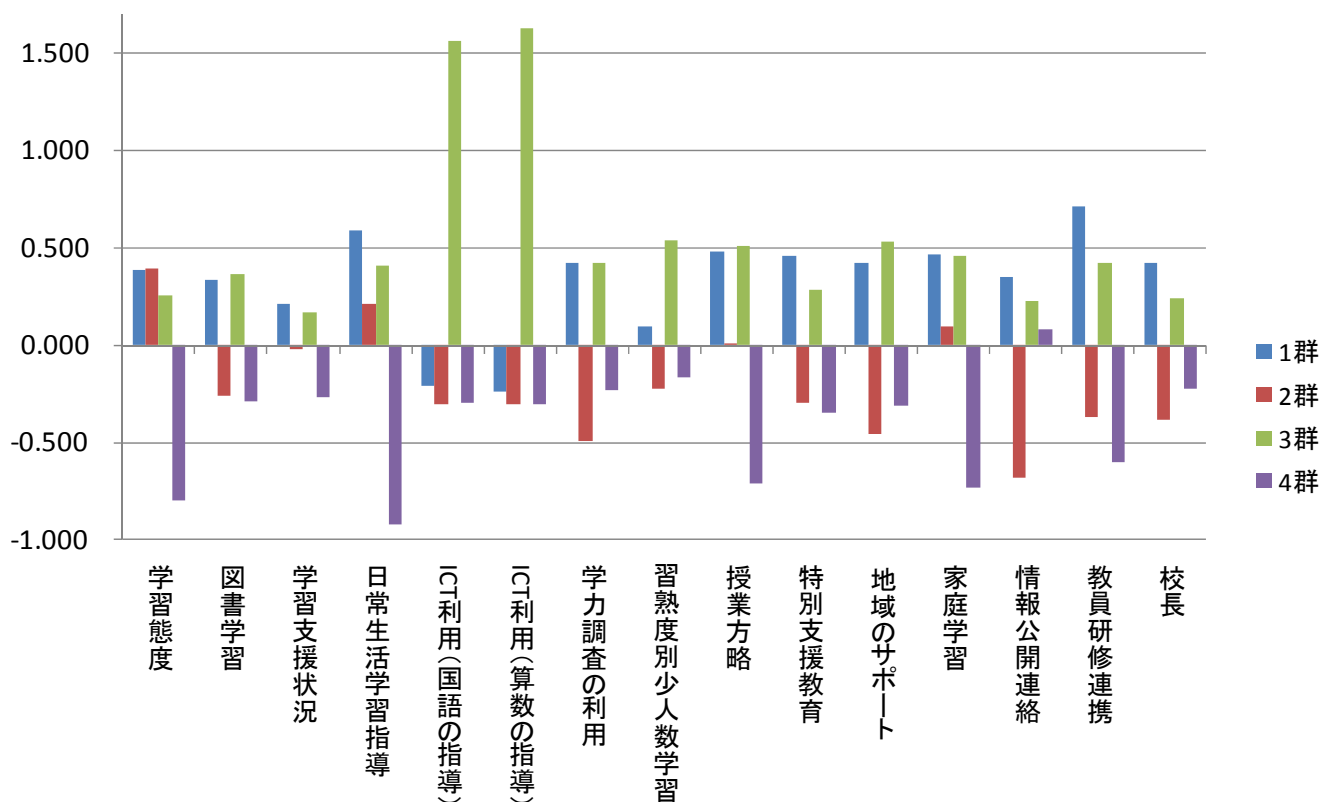


図2 各質問群の群平均

表7 分散分析の結果	
質問群	結果
学習態度(3項目)	F(3,9184)=1245.62, p<.001
図書学習(3項目)	F(3,9184)=322.94, p<.001
学習支援状況(3項目)	F(3,9184)=128.82, p<.001
日常生活学習指導(7項目)	F(3,9184)=2062.89, p<.001
国語の指導(3項目)	F(3,9184)=2228.79, p<.001
数学の指導(3項目)	F(3,9184)=2582.01, p<.001
学力調査の利用(5項目)	F(3,9184)=555.14, p<.001
習熟度別少人数学習(7項目)	F(3,9184)=215.57, p<.001
授業方略(10項目)	F(3,9184)=1103.26, p<.001
特別支援教育(2項目)	F(3,9184)=475.74, p<.001
地域のサポート(5項目)	F(3,9184)=650.66, p<.001
家庭学習(12項目)	F(3,9184)=1096.37, p<.001
情報公開連絡(4項目)	F(3,9184)=577.69, p<.001
教員研修連携(10項目)	F(3,9184)=1470.29, p<.001
校長(2項目)	F(3,9184)=386.87, p<.001

## 5. 学校類型化と学力調査結果との関連

学校類型化と学力調査結果との関連の検討を行った。

各群の特徴を明らかにするため、学力調査の結果との検討を行った。国A、国B、算A、算Bの4科目それぞれの得点（各学校の平均正答数）を合計した値を算出し総正答平均とした。国A、国B、算A、算Bおよび総正答平均の群ごとの平均を検討した結果、科目による差は見られなかった（全て同じ分布であった）。そのため、本章の検討に際しては、総正答平均を用いる。群ごとの総正答平均の概要は表8の通りである（小学校、中学校の群ごとの平均は図3参照）。

小学校(N=17851)				中学校(N=9188)			
群	N	平均値	標準偏差	群	N	平均値	標準偏差
1	3548	39.10	3.82	1	2756	62.73	5.93
2	6058	38.44	3.73	2	2210	63.14	6.60
3	3515	37.94	3.87	3	1346	62.29	6.60
4	4730	37.09	3.91	4	2876	59.01	5.54

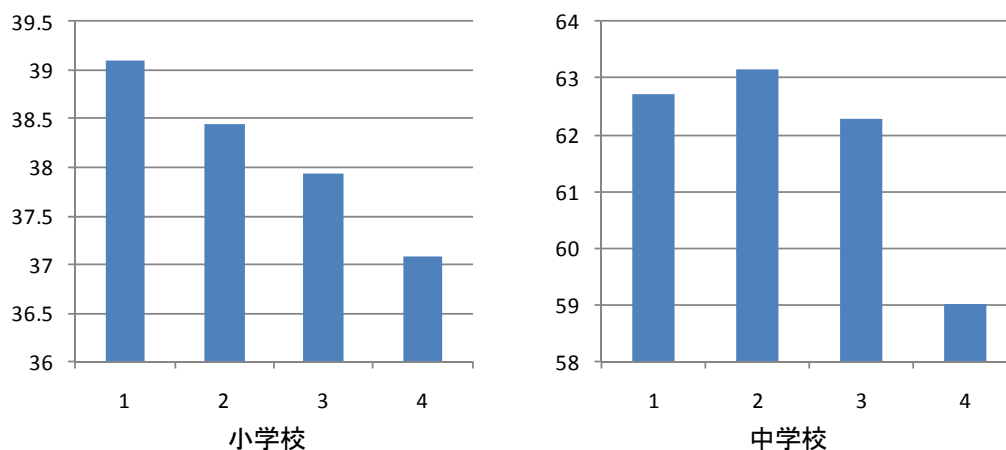


図3 小学校、中学校の総正答平均の群ごとの平均

総正答平均に関して各群で差異があるかを検討するため、分散分析を行った結果、小学校、中学校ともに、群による差異は有意であった。最小有意差による多重比較の結果、小学校、中学校ともに全ての群間において5%水準で有意差が見られた。以上の結果より、本分析によって類型化された4タイプの学校群の学力調査結果として、以下の傾向が読み取れる

小学校；1群 > 2群 > 3群 > 4群

中学校；2群 > 1群 > 3群 > 4群



## 6. 各類型の内容の検討と意味づけ

### 6.1 各クラスタを代表するケースの選定

4章でクラスタアナリシスを用いることにより、小学校、中学校をそれぞれ4群に弁別し、その特徴を学校質問紙調査の質問項目を基に検討してきた。本章では、類型化における、各群の解釈をより正確に行うために、小学校・中学校を対象に聞き取り調査を行った。そのために、各クラスタの特徴を代表している学校の選定を行った。

各クラスタの特徴を検討するためには、クラスタ毎に1, 2校の選定を行い聞き取り調査を行っただけでは、明らかになった事象が当該クラスタの特徴を表しているものなのか、それぞれの学校が固有に持つ特徴なのか明らかではない。しかし、聞き取り調査を行うにはそれなりの時間が必要となり、調査可能な学校数には限界がある。そこで本研究では、クラスタごとに4校、小学校中学校あわせて32校の学校の選定を行った。

学校の選定は、クラスタごとにクラスタの重心からの距離に近い20校を対象予定校としてサンプリングし、その中から、学校の了承を得られ、かつ調査可能な学校を実地調査校として4校選定した。その際に、都道府県の偏り、地域規模の偏り、学校規模の偏りを出来る限り考慮した(表9参照)。

小学校		中学校					
	地域規模	学級数規模					
第1群	A小学校	その他の市	18~23学級	第1群	A中学校	大都市	9~11学級
	B小学校	大都市	12~17学級		B中学校	その他の市	3~5学級
	C小学校	町村	12~17学級		C中学校	大都市	15~17学級
	D小学校	大都市	6~11学級		D中学校	その他の市	12~14学級
第2群	E小学校	その他の市	18~23学級	第2群	E中学校	その他の市	12~14学級
	F小学校	その他の市	12~17学級		F中学校	その他の市	12~14学級
	G小学校	その他の市	24~29学級		G中学校	大都市	18~20学級
	H小学校	大都市	12~17学級		H中学校	中核市	15~17学級
第3群	I小学校	中核市	18~23学級	第3群	I中学校	その他の市	3~5学級
	J小学校	大都市	24~29学級		J中学校	大都市	12~14学級
	K小学校	大都市	24~29学級		K中学校	その他の市	12~14学級
	L小学校	大都市	18~23学級		L中学校	その他の市	15~17学級
第4群	M小学校	その他の市	18~23学級	第4群	M中学校	その他の市	12~14学級
	N小学校	中核市	12~17学級		N中学校	町村	15~17学級
	O小学校	その他の市	12~17学級		O中学校	その他の市	12~14学級
	P小学校	大都市	6~11学級		P中学校	中核市	18~20学級

### 6.2 聞き取り調査概要

実施時期 ; 2010年2月~3月

時間；1校あたり1時間30分～2時間

対象者；校長先生または教頭（副校長）先生（両方在席の場合もあった）

インタビュー；インタビューは下記の表10に示す11の大きな質問を含んだ半構造化面接法で行われた。

インタビュー実施時には、のちの分析を考慮して、ICレコーダーでの録音の許可をもらった

表10 インタビューにおける質問項目

1	学校の特徴について	7	補充的・発展的学習の現状について
2	子どもの学習態度についての認識	8	学力調査の結果の活用に関して
3	学習を習慣づけるために行っている取り組み	9	学校と地域との連携について
4	家庭学習の習慣づけるために行っている取り組み	10	学校で行っている教員研修に関して
5	情報機器の導入状況と授業利用に関して	11	校長のリーダーシップに関して
6	習熟度別・少人数別授業の実施に関して		

### 6.3 聞き取り調査結果

全学校の聞き取り調査のデータを会話の場面ごとに文字化し、インタビュー内容に関して、表10の各項目ごとに整理した。小学校、中学校ごとに、群の特徴を検討した結果、1群、2群、3群、4群それぞれにおいて、小学校、中学校ともに質的に類似した特徴を有していることが推察された（cf. 小学校1群と中学校1群の特徴は質的に類似していると推察できる）。以下に、小学校、中学校それぞれの群の特徴を、実際のデータを基にしながら述べていく。

#### 6.3.1 小学校1群の特徴

- 校区は、主として文教地区や人口移動の少ない住宅地である

・「所得の高い人が住んでいた、周囲から見ると文化的なところに見えていたらしい。このプールも地域の方々がお金を出して作ったものです。（中略）割とハイソサエティの人が多いです。」  
・「町の学校から独立をした学校なんです。そのときに地域で請願して作った学校です。（中略）本校は地域の方々がとっても大切にしている、自分たちの地域の学校だと誇りにしている学校で、学校に対する思いが強いのがあります。」

- 家庭を含む地域との連携が非常に密に行われている

・「独自に教員採用をしております。もちろん正式に担任を持てる教員ではありませんが、町費の教員が本校にも3人、それから発達障害を持ったお子さんがいらっしゃいますので、その子をサポートするサポーターが1人。計4名、すべて町の費用です。」  
・「自治会等の組織がしっかりしている。子供会があるわけなんですけど、各町内会、その下に子供会があり、それを束ねて子供会育成会という大きい組織を作り、（中略）、地域で子どもたちを育成するという考え方で進んでいます。運動会はここの校庭で学校の運動会と地域の運動会を一緒に連合で共催します。（中略）非常時には子ども会単位で集団下校する。学校からPTA会長さんに連絡すると全地区に連絡が回るという連絡網が出来ていまして、学校独自のものは逆に持っていないんです。」

- 学習（家庭学習，習熟度別少人数学習，補充・発展学習）に関しては、きめ細やかな教育実践が行われており、かつそれらの完成度が非常に高い

（家庭学習）

- ・「学校として各家庭で、各学年ではこういうことをやりますのでお願いしますよ、家庭でも見てくださいということで、教務のほうからプリントを出します」
- ・「家庭学習の手引きというのを作りまして、低学年用、中学年用、高学年用と。それを見ながら宿題の他に、例えば音読をしたりとか、宿題をしたりとか、（中略）実際に取り組んできました。（中略）子供が一週間やってきた（宿題以外の自主学習）課題を教員が見るわけですね。丸つけてコメントつけて返しますから、これは大変な仕事量になっちゃうんですね。（後略）」

（学習全般）

- ・「加配の教員が一人ついているので、その方を高学年に配置して国語を中心に授業を行い、部屋の中で個別指導に入ったり、ちょっと分けて隣の部屋が空いたら分かれてそちらで勉強したり（中略）している。」
- ・「放課後、教室には市が取り組んでいる自学自習支援システムといって、バーコードを押すとプリントが出てくる機械をおいている。また、教員免許を持っている人や大学生を雇用し、火曜と金曜に2年生以上の子どもで放課後勉強したい子供を集めてやっている。授業と放課後で学びの連続性をしっかりやっていきたい。保護者も積極的で、子どものやったものを残していこうということで、コンピューターから出されるものをプリントアウトして、保護者欄，担当の先生それぞれにコメントを書いてもらっている。」

（補充・発展学習）

- ・「基本的に小中学校は補充的指導っていうのは大得意なんです。（中略）ただ発展的指導ってなった場合あまり得意ではない。（中略）正規の時間の中でっていうと難しいですね。放課後とかになるかと思いますね。（中略）うちでは幸い放課後どんどん残して指導してくれという要望が保護者からありますし、（中略）放課後に違いに応じた対応っていうのを各担任がやっています。」

- 教員の研修に関して、学校独自の考え方とプログラムを有している

- ・「年度初めに年間計画を立てて、全員授業、年一回は公開する。一カ月に一回、授業参観ウィークとして教室を開けて、他の教員に公開している。その前に自分で、今指導で困っていること、工夫していることを全員が書く。自分の振り返りになる。それが一覧表になってみんなに配られる。それを読んで、この先生こんなんでも苦労してるんや一とかわかる。参観ウィークであってもなくても行くので、誰が来てもいいかなという雰囲気での研修になっている。」
- ・「退職校長が、新任の先生の授業を見に来て、指導助言をしている。校内研修も充実していこうということで、授業に関わる研修だけをピックアップしています。それを学校通信（に載せています）、全部わたしの手作りです。行事は学年便りに載せているので載せないです。学校の中でどんな研修をしているのか等の私の思いを載せました。保護者に公表です。先生も夏休みにこんなことをやっているし、遊んでいないという PR にもなっています。月に2回出しています。」

- 校長のリーダーシップは率先垂範型で非常に強く発揮されている

### 6.3.2 小学校 2 群の特徴

- 校区は、必ずしも恵まれた環境であるとはいえないが、学校の創意工夫によりそれを克服している

- ・「周囲の環境は非常に厳しいです。厳しい環境の中にいる子どもたちですね。(中略) 教師が危機意識を持っている。いつ何時、くずれる事が目に見えている。朝の打ち合わせは一切しておりません。勤務時間までに来て教師は必ず教室で子どもたちを迎える。(略) どんどん子どもと向き合う時間を作りなさいと、だから職員会議も 2 カ月に一回」
- ・「要するに歴史が古いです。(中略) 校区が広いのでバス通学の子がかなりいる。4 キロ以上の子どももいますし。(中略) 私のところは不登校が多いんですよ。10 人前後、来られるようになってからもまたもっぺん戻ってしまったりということもあります」

- 家庭を含む地域との連携は“非常に密である”とは言い難いが、ある程度の連携は認められる

- ・「学校経営もオープンなところはオープンにしようと考えています。特に担任と保護者じゃなくて、その中に入らなくてもいいから必ず校長も横にいるようなスタンスで学校活動しています。(中略) 毎月、校長と語る会ってやっているんです。突然、保護者の方が校長室に来ていただいて、色々な不平不満を語るという会です。」
- ・「地域との関係は上手く行き過ぎてますね。(中略) ものすごく協力的です。授業に関しても、ぱっと頼んだらぱっと来てくれます。(中略) ただ、あまりにも過度な、地域の方の学校に対する要求、(中略) は違うやろと、もっと違う連携の仕方があるだろうと」

- 学習（家庭学習、習熟度別少人数学習、補充・発展学習）に関しては、独自の教育理論とそれに基づいた教育実践が行われている。また、習熟度別少人数学習に関しては、明確な理念のもと、独自の取り組みがなされている

#### (家庭学習)

- ・「基本的生活習慣で、PTA と連携してやってますけれども、家庭での学習の定着、習慣これが弱いように思います。生活習慣、学習のアンケートは取っているんですけども(中略) 親が働いているので子どもが一人でご飯を食べたりしてる子もいるし、家で学習を定着させていこうとお母さんお父さんがたもエネルギーがね、昔に比べたら仕事にとられて、子どもを見る時間がなかなかない。」
- ・「学校から親へのアプローチはするんですが、なかなか習慣が身に付かない地域なんです。」

(習熟度別・少人数)

- ・「行っていません。(中略) 二つの学級を二つ編成しながら授業するってのは部屋がないんです。子どもたちを分けてやる部屋がない(図工室も図書室もすでに普通教室に転用している)。それが大きなネックです。もう一つは、(中略) 少人数学習指導の加配をもらっているんです。ただ、子どもと上手いかわからない先生が多い、教科の指導ならばできる。そういう教員に本当の習熟度別学習は違うんだよって言うてもなかなか分からない、(後略)」
- ・「私が難しいと思っているのは、少人数担当、要するに TT 担当者がね、本当に算数についていろんなこと、極端に言えば担任よりも算数について色々考えてコーディネート出来る人であれば、非常に効果的にできる(中略) 逆にクラスを持たなくてというか、そういう先生が少人数や TT を担当しても効果があるとは思えないんです。」

(補充・発展学習)

- ・「特別支援教育をやっている、それを適宜、必要のある子どもに行っています。21 人です。授業時間中に親の許可を得て、本当に基礎中の基礎を別室で行います。1対1の場合もありますし、同じ学年だったら1対3の授業もあります。」
- ・「発展の学習は、理科の発展をしております。大学の先生において頂いて指導してもらっています。もちろん大学の専門的な講義は分からないので、見て分かる形にして学習しました。3,4,5,6年生は、発展的な学習はそういう形で、大学の先生において頂いて指導してもらおう形にしております。」

● 教員研修に関しては、緻密な研修計画が実施されている

- ・「全職員で授業を見てその協議会をするというような形でやりますが、全体授業研修でございます。本校の研修主任が担当した授業でございます。それが全体で、これは研究構想を提案するための授業ですが、それを受けて理科と生活科でそういう授業を、全体で見れるような授業をいたします。(中略) 実際の授業を組み込んだ研修を実施しているところです。」
- ・「お得意研修っていうのをやっている。みんな夏休みに得意なものを持って。(中略) 教員同士で講師をやる。理科の教員が理科の実験室とかでね。そういう趣味の世界から、授業につなげていく。学ぶ気持ちがあれば、どこでもやりますね、研修は」

● 校長は“校長のリーダーシップ”に関して明確な考えを持ち、学校内において強く発揮されている

### 6.3.3 小学校3群の特徴

● 校区は、様々な家庭環境がある地域といえる

- ・「地域の特性というか、ここは市営住宅があり、(中略) 4割弱、そこから通っている子がいるので生活度合いの格差があるので、子どもたちの心のケアの問題もある」
- ・「本校は非常に古い学校ということで、住宅地の中にある学区域が広いんですよ。住宅地だけじゃなく、純工業地域とかも抱えていること、それから社宅等を抱えていて、それぞれの地域ごとに家庭の状況は異なっているため、放任の家庭のお子さんは課題が非常に多いです。」

- 家庭との連携に課題が見られるが地域との連携は市の支援などを受けて行うように努力している

- ・「(家庭教育について) 我関せずの方が多いですね。先生にお任せしますというような方が多いです。(略) だから、学校として保護者に家庭学習をこれだけやって下さいというような呼びかけも特にしていない」
- ・「地域とのタイアップで学級存続を高めていこうっていう方針でやっていますので、各学級もそういった形でどんどん外からの外部講師をいれたりとか、ボランティアを入れたりとか、結構活動はしているんです。」
- ・「地域の人材ということで、外部の方を結構入れて、いろんなものをやっています。特にうちは日本の伝統文化ということで、能楽をやってもらったり、(中略) 琴と三味線、琴なんかは一人に1台、50~60台くらいは持ってきてくれて体感できるんです。(中略) そういう風に外部の人材を入れると、(中略) (この活動は) 市として特色ある活動ということで、支援を受けています。」

- 学習(家庭学習、習熟度別少人数学習、補充・発展学習)においては、市教育委員会の支援を活用した形での実施が見られる

(家庭学習)

- ・「(家庭学習に関しては) 担任の悩みでしょうね。家がしっかりしていないとなかなか・・・親御さんも仕事のほうで忙しいということでやってこない子どもはやってこないというのが担任のなやみですね。(中略) いくら連絡してもなかなか協力していただけない」

(習熟度・少人数)

- ・「5・6年生は少人数、3・4年生はTTでやっています。職員が一人、加配されるので。(中略) 習熟度ではないです、少人数指導です。正直言って、計画的ではないのだけど、ここの場面は習熟度でやろうとかここでは少人数にしようとか、(状況や単元に応じて) その都度変えています。とにかく、人がいないので。色々な支援員を交渉をしています」
- ・「個別指導が一番ですね。小グループに分けています。ペア学習とか小グループ学習。昨年度の5年生の算数に関して、県から一人学力向上の面で、週2回、専科教員の先生が来たときにクラスを二つに分けました。」
- ・「3年生以上の算数で習熟度別指導、あるいは場合によっては少人数指導を行っています。(中略) 習熟度別少人数指導が教育委員会の一つの施策であるってことで、3年生以上から講師をつけています(教育委員会独自の加配)。」

(補充・発展学習)

- ・「補充的な部分は、プリントがいくつも何段階にも区分されていますから出来るんですけど、やっぱり発展的という部分については、教員の意識が低いです。」
- ・「補充的学習や発展的学習はあまり考えられていない。担任の先生たちは単元を終わらせることだけでいっぱいなんです」

- 教員研修に関しては、一部の学校を除いては教育委員会の研修プログラムに基づく研修を実施しており、学校独自の研修システムに乏しい

・「教員研修に関して、独自のものをやっているというよりも、今度やろうとしているところです。（中略）（教員は）研修が非常に多いところがあるのです。初任者研修なんて以前は 300 時間もありまして、（後略）基本的に、決められた研修をこなしています。」

・「（教員研修に関して）また市のほうになるんですが、教員研修センターっていうのがありますが、パソコンだけじゃなくて、講座をいっぱい持っているんですよ。（中略）研修センターの講習一覧ってこういう風いっぱいあるんですね。市教委でやっています。必ずやるものもありますし、後は希望ということで、一人一回は 1 年間に希望しようということでやっているんです。研修は市でやっております。」

- 校長のリーダーシップは比較的弱い傾向にある

### 6.3.4 小学校 4 群の特徴

- 校区は多様であり、特に一貫した特徴は認められない
- 家庭環境の多様性が他の群よりも高めである
- 地域との関連において、特徴のある活動をしていない学校も中にはある

・「私、家がすぐそこなんですよ（学校のすぐそば）。それで 20 年この市に通っていて、この学校の場所知らなかったんですよ」

・「学級がうまくいっているからいいんだと思います。うまくいかないと、言うことはきちっと言うという感じですね。まあクレームというほどでもないですが、おかしいんじゃないですか、ということもきちっと言われます」

・「（地域との連携に関して）この学校としての特徴っていうと、そんなにはないと思うんですね。市内一斉に、地域の方のボランティアが、毎朝立ってくれるという感じです。」

- 学習（家庭学習、習熟度別少人数学習、補充・発展学習）の改善や新しい教育方法への姿勢に関しては、積極的ではない

#### （家庭学習）

・「宿題をするのは当たり前、明日の学習準備をするのは当たり前という感覚を持っていない家庭が、10～15%ある。（中略）いくら生活面でかなり厳しい状態におかれていても、その中でも生活習慣や学習習慣をつけさせようとされている方もいるが、大部分は生活に追われてしまってそういう余裕はない。そういう子どもは家庭ではもう放任に近い状態。（中略）学習環境、特に家庭学習、宿題の定着度について言うと、色々と保護者に語りかけているが全体の 1 割くらいは一向に変わらないと担任のほうから報告を受けている。」

・「（家庭学習に関して）その辺は担任に任せていますけど、大体のクラスが毎日、特に算数と漢字は宿題に出していると思います。（中略）（家庭との連携や家庭学習に関して学校としての方針は）学校としては特にとっていません。」

(習熟度別・少人数に関して)

- ・「この学校では習熟度別というかたちではやってない、やるとしたら2人の先生がそれぞれ2つに分ける、少人数の形ですね」
- ・「コンスタントにやれている時期とやれていない時期があります。その時の子どもの実態とか、教師集団の姿勢とか、少人数指導の担当の意向とか、それを受ける学年の体制とかによって、コンスタントにやれていた時期もある（今はやっていない）。」

(発展・補充学習)

- ・「発展的な学習ですか、どんどん自分でできる子なんかはちょっとレベルの高い課題を先生が与えるとか、どうしても授業を進めると発展よりも補充に重きを置きます。(中略) 本当に補充が必要だと思ったら個別にやっています。この子だけ別室で先生がついて、という感じです。」
- ・「補充的な学習にたいして、休み時間なり放課後子どもたちを残して、個別に対応している。また、長期休業中に2週間くらいかけてやりますが、自由参加です」

- 教員研修に関しても、しっかりとした計画に基づいた実施が見られない

- ・「校内研修という形にはなっていないんですけども、一番やっているのは学年会の中です。(中略) 学年会の中での研修が一番多いかと思います。基本的には、時間をつくって、週1回行っています。」
- ・「市の研究指定でことばの時間というのをやっていました。研究指定を受けたことが大きい。本格的に研修に取り組む機会になった。」

- 校長のリーダーシップに関して、消極的な姿勢が目立つ

### 6.3.5 中学校1群の特徴

- 校区は、主として文教地区や人口移動の少ない住宅地であり非常に恵まれている地域といえる

- ・「マンションやアパートが少なく、一軒家が多いです。この辺りに家が建ち始めたのは、今のおばあちゃん、おじいちゃん世代のころから開発が始まったので、ある程度、安定した地域だと思います。なので、全体的に落ち着いていて、学校に対する協力も他と比べて良いと思います。」
- ・「開校約30年の学校ですが、市内に南と北と2校に統合して出来たということで、出来た当初から大事にしてきたことは、地域と共に歩む学校と、子どもを地域と一緒に育てていこうということ、そういうことをすごく大事にしてきた学校です。(中略) 保護者と一緒になって同じ目線、目線は違っても同じ方向を向きながら、子どもを両面で支えていって行くというそういう意味での地域と地域家庭と共に歩む学校です。」



● 家庭を含む地域との連携が非常に密に行われている

- ・「この地域が災害時要援護世帯と言いまして、75歳以上の夫婦だけで住まわれている数が非常に高い割合で災害支援が必要なお年寄りが多く住んでいるということから、(中略)地域と学校の連携事業の推進(市の事業)に手を挙げて、若干の予算を頂いて進めております。具体的には、地域に貢献できる学校を増やしていこうということです。(中略)生徒が救急救命講習を半日かけて受けています。」
- ・「(地域との連携)一つは学校講演会ね、地域の機能とか、あと個人からお金を頂いて、講演かとして毎年、まず金銭面でバックアップして頂いている。(中略)小さい集落単位で子ども会の育成会組織があるんですよ、中学生も会員ですけども、(地域に)感謝するっていうことでボランティア活動に子どもたちが行くんです。で、受け皿として地区長さんとかが押し量ってくださって、今回はここのごみ置き場のペンキ塗りしてもらおうとか、この花壇の草むしりしてもらおうとか、仕事を与えてくださって、感謝しています。」

● 学習(家庭学習、習熟度別少人数学習、補充・発展学習)に関しては、独自の教育理論とそれに基づいた教育実践が行われている。また、習熟度別学習に関しては、明確な理念のもと、独自の取り組みがなされている

(学習活動)

- ・「毎日やっているのは、自主学習。これは学年によって様々ですが、ノート1ページであったり、何か教材、各教科で用意しているワークなんかでも構わないんですが、その点検の際に、生活の記録という日記みたいなものを年間かけて書いていまして、担任が毎日見て赤ペンを入れて、必要な指導を入れたり声かけしたりしています。」
- ・「自主学習ノートのグランプリをイベント的にやって、啓発を促していく、それから生活記録があるわけです。その部分をチェックしながら、学習時間をチェックしていくということ、これが一番大きい一つの学校単位の取り組みです。」
- ・「(習熟度別少人数学習について)うちの学校は多くて33,4人、少なくとも27人とわりと小規模な中でのことですので(行っていません)、授業は一斉です。私たちもその生徒の習熟度っていうのをある程度は把握していますから、その生徒に合わせてここまで伸ばすための声掛け、ある生徒はここまで出来ているので、その先ここまで伸ばせるための声掛けという風に、生徒一人一人に対することはやっております。」

(発展・補充学習)

- ・「そのクラスに合った学習プリントを使ってやっけるのは基本的なクラスの中に(学力の)低い子もいるもんですから、それに合ったプリントを準備します。まあ、それを補充的って言えばその通りだと思います。発展的なものについては、それに(その子に)そった問題作っているわけですから、そのちょっと深みがあったりちょっと解きごたえがあったりっていうのは発展的なものだと思います。何か発展と補充という言葉が先にあるんじゃないかと、あくまでも自分が持っている子どもに合わせてやっています。(発展や補充という言葉は、現場の教員は)あまり考えていないですね、多分。現場の受け方でいえば、その子に合った学習を行っています。」

- 教員研修に関しては、緻密な研修計画が実施されている

- ・「授業公開は多いと思います。学期に1回ずつ授業公開はあります。それプラス授業参観で学期に2回は必ず入ります。それに加えて市教委訪問がありまして、それで見ます。それには保護者も入れます。本校の研究発表会も保護者を全部入れます。先生たちが市の指導主事の前で一生懸命授業をやっている姿を見てもらって、先生たちも勉強しているんだということ。（中略）人に見られることで先生たち、良く見られようという気持ちが出て、何か工夫すると思いますし、慣れていくということになると思います。指導案を書いて授業公開するのでしたら、見てもらったらいんじゃないかということです。」
- ・「ここら辺の地域の学校の先生方の組織に現職教育教員会というのがあります。ここで、授業に関する年間計画を立てて研究している。（中略）これは、小中一緒ってことで、小学校の授業を他の中学校の先生も見たり、そういうやり取りが大事だってことで、情報交換できるように、一緒に活動できるようにした組織なんです。市町を超えたそのつながりが出来る。この研修組織が、小中連携の授業交流の一番大事なところだと思います。（研究冊子は）学校ごとのまとめ、教科ごとのまとめと作っています。完全に小中一緒に授業に見合っただけで深めていく、小中共通のテーマをまあ教科ごとに作ってやっていくっていうのが中心です。中学校の先生が小学校の授業見たことないっていう先生はこの辺にはいないです」

- 校長は"校長のリーダーシップ"に関して、明確な考えを持ち、学校内において強く発揮されている

### 6.3.6 中学校2群

- 校区は、必ずしも恵まれた環境であるとはいえないが、学校の創意工夫によりそれを克服している

- ・「市内の中では落ち着いているほうじゃないかなと思います。不登校傾向の子どもたちもいますし、反社会的な行動をする生徒もおりますけれども、比較的落ち着いた学校であると。（中略）マイナス面としては、規範意識が低いかなというような感じがします。（中略）やはり万引きとかですかね、注意してもなかなか止まらないみたいな（後略）」
- ・「ここ昨今は、生徒指導のほうも随分と落ち着いてきていて、静かに授業をやれている状況になっていますので、そういう意味では大変助かっていますけれども、いつ何が起こるか分からないという、そういう危機感を持って教員はあたっているというところ。（中略）もう、手を緩めればいつ学級なり授業が崩壊してもおかしくないくらい」
- ・「教員を教員とも思わないほどの学歴の方もいたりします。（中略）自分の子どもはこの学校に入学すると488人いるから488分の1になるということが、子どもも保護者もあるところで理解できていない。だから、うちの子どもは非常に不利益を受けているとかそういう形で話をされる保護者が他の地域より多いような気がします。」

● 家庭を含む地域との連携は“非常に密である”とは言い難いが、ある程度の連携は認められる

- ・「地域と連携はなかなか取れないと思うんですけど、学校周辺の清掃活動、これについては地域の方も参加をしていただけるという形で地域と一体になって行事が出来る。それと生徒会が同居老人の方に朝顔を配布しているんですけど、そのあたりですね。」
- ・「(地域の協力に関して) 生徒指導面だと比較的協力的、ただ学習面で……。やはり問題行動があったときの保護者に来校を促したりとか、こういう指導をしましたっていうときの保護者の対応だったりとか、それを聞く限りでは理解を得られている。」
- ・「そうですね、地域との連携はまず、地域の方々が小学校を支援する組織があるんですけども、中学校にも連携して頂いているんですよ。地域と中学校を結び付く役割を橋渡ししてくれるんです。小中連携の1つです。」

● 学習（家庭学習，習熟度別少人数学習，補充・発展学習）に関しては、独自の教育理論とそれに基づいた教育実践が行われている。また、習熟度別学習に関しては、明確な理念のもと、独自の取り組みがなされている

(家庭学習，自主学习)

- ・「家庭に戻った場合には、家庭の中に学習っていう要素がない家庭も随分ありますし、宿題を出してもやらない、やれない状況がある。(中略) 家庭学習をするような強力な指導はしてない、というよりもそれを家庭に求めるのは無理じゃないか、(中略)、家で出来ないんだったら、学校でやりましょう(後略)」
- ・「自学自習ノートで、家でやったこと、学習したことを担任に出して、担任が毎日こう返すというような、教科の宿題以外でそういうことをやっています。」

(習熟度別・少人数)

- ・「基本うちで習熟度別でする学習はやっていません。TT の中で、授業の中で低学力の子は別室で、3対1とか先生1に生徒3とかでやっているが、組織的に習熟度別の学習は進めていません。」
- ・「(習熟度ではなく) 少人数学習ですね。1年と2年についてはクラスを半分に分けて授業していますけれども、ランダムに分けてですね、習熟度別に分けてはおりません。(中略) 習熟度別は、やはり子どもの納得と親の納得をしたうえでないとなかなか実施できないですね。それと習熟度別をやると評価の問題が出てくるんですよ。(中略) どうしても習熟度の高いクラスは先に行ってしまう、低いクラスは丁寧にやりますから時間かかります、それで同じテストをしたんでは、どうしても差が出るのは当たり前。それで全体で評価しなくてはならないですから。(中略) 自分自身では、習熟度別が絶対よいとは思っておりません、実は。習熟度の高い子もいる、頑張らない子もいる、学級の中でですね。そういう中で、お互いに切磋琢磨をして学力を高めていくのも中学校の働きじゃないかって思うんです。」

(補充・発展)

・「夏休みは大体 10 日から 15 日くらい数学と英語に関してはやっています。2 学期の 12 月頃から放課後週一で全学年ともに、数学は、これは基礎学習なんですけど、個人学習と呼んでいて、大学生が来てやっているんです。英語も来てます。(対象に関しては) 今、大きな問題になっています。学校が考える補充学習って運営は楽なんですけれども、保護者も生徒も満足しないんですよ。教員サイドの問題、運営側の問題です。(中略) 基礎をやるんだったら 20 人くらいだろうと募集する、それは学校側の希望なんです。そこで子どもたちの希望が 100 人だったらどうするの? ごまかすような形でやることはやるんですけど。それで、1 年生は最終的に希望性になりました。2 年生は教員の意図がかなり入っています。3 年生は完璧に教員の意図です。(中略) 発展的学習は検定試験です。漢字検定、英語検定、数学検定で中学校の時点で受験する子供を育てようよってことでやっています。学習の機会は、やはり均等に与えないと。勉強したくてしょうがないっていう子がいるんです。」

● 教員研修に関しては、緻密な研修計画が実施されている

・「先生たちに言っているのは、基礎基本の活用を中心にしようということです。目標を立ててもらって、それで授業研究、1 年で一人一回はしようということです。出来るだけ授業を見に行く。(中略) 自分は他の教科だから、他の先生の授業を見ても意見が言えないということだけは絶対言わないと。他の教科を見ることによって自分の教科が磨かれるというようなところが絶対ありますので、その教科の本質を強化的な指導については、その先生がトップなんだけども、他の授業の中で得るものが必ずある、と言っているんです。」

・「今年から、OJT システムをやっているんです。教員を 5 つのグループに分けているんです。1 グループ 5 人くらいになるんですけど。それが 1 年を通しての研修グループです。(グループは) 経営的な戦略があって、主任教員を各グループごとに一人ずつつけて、育てたいと思う教員をうまくこの教員のグループに入れて、同じ教科が入れるなら入れてる。年 3 回、授業して研究して、公開して、その公開したグループの 4 人がみる。これが 5 つ同時進行で行われている。」

● 校長は"校長のリーダーシップ"に関して明確な考えを持ち、学校内において非常に強く発揮されている

### 6.3.7 中学校3群

#### ● 校区は、様々な家庭環境の家庭がある地域といえる

- ・「旧商店街の若旦那衆の息子娘が来ているという状態がしばらく続いたんですけど、今はパートですね。(中略) 家庭環境が非常に厳しい子どもたちが頑張ってきている。」
- ・「もともと集合住宅の中にある学校だった。そういったことで色々親御さんたちの考え方もだいぶ違ってきましたし、子どもたちの成育歴もですね、かなり厳しい子たちもいるんです。(中略) やっぱり日ごろの生活も大変だなっていう子たちが多い部分であります。(中略) 正直言って勉強どころじゃない。衣食のほうだよ。もうご飯食べないで給食を当てにしてね、という感じのご家庭も結構あります。」

#### ● 家庭との連携に課題が見られるが地域との連携は市の支援などを受けて行うように努力している

- ・「(地域との連携) 中学校より、小学校のほうが強いと思います。割とその熱に比べると中学校になってくると少し(弱い)。ですから、地域の子どもたちが地域の小中学校に行くっていうのがだいぶ少なくなってしまう。」
- ・「(家庭との連携) それがなかなか難しですよ。(学習習慣等に課題のある生徒)の保護者の方は、学校でやる保護者会には来ないですから。学年便りとか学校便りとかそういう(紙媒体で)家庭には出しているんですけど、親の方まで浸透していない」
- ・「地域の方に授業に入ってきていただきたいというのがあるんですが、この辺りの地域っていうのが、子どもたちが地域活動に参加できないというより、参加しない状況にありまして、まず、地域の方へ学校から働きかけないといけない。」

#### ● 学習(家庭学習、習熟度別少人数学習、補充・発展学習)においては、市教育委員会の支援を活用した形での実施が見られる

##### (家庭学習)

- ・「家庭学習の時間が少ないです。(中略)家庭学習時間、1週間に10時間以上となってましたが、全然達成できませんでした。(中略) 自由学習ノートみたいなのを作りまして、今の子ども達、教員に認めてもらうのは結構好きですので、自分で好きな勉強をノートに書いて持ってくるというようなことをやりました。」
- ・「宿題の量の調整というのは難しいので、あまり手がまわってないですね。むしろ家庭が多様なので、学校の授業そのものをしっかりと、50分を充実した内容にするのが基本だろう」

(習熟度・少人数)

- ・「本校では1年生で数学のほうが少人数をやっています。3年生は英語、それから理科で少人数編制をやっています。それぞれの教科とも、子どもの実態、それから単元によっていつでも習熟度別ってわけじゃなく、機械的に分けたり、興味、関心に分けたり、TTを組んでみたりとかということで対応しています。問題は人です。極めて、小中学校は教員が足りない。これほど教育危機が言われているにもかかわらず、高校に比べて教員が足りてないです。」
- ・「2年生の英語と数学ですね。教員の持ち時間が1週間18-20時間あるんですけど、それにプラス少人数、TTを15時間ということなので、1人の加配に対して。ですから、英語と数学を2年生で習熟度別を行っています。クラスの分け方は、一方的ではなく、テストの結果などを見ながら、あなたは応用のほうでどうですか、あなたは基礎のほうでどうですかという風にいったん薦めるんです。子どもが親と相談して答えが返ってきますから、それで成立ということですよ」

(補充・発展)

- ・「土曜学習教室をやっているんです。希望者だけをとっているんですけども、数学、英語で土曜日、年間30回なんです。でも、うちの場合、部活やなんかもあるから15回にして午前午後の部に分かれて、どちらか出られる方に出なさいと。で、120人くらい参加しているんです。それに対して指導するのは、教育委員会で雇っている講師の方にやってもらってます。」

- 教員研修に関しては、一部の学校を除いては教育委員会の研修プログラムに基づく研修を実施しており、学校独自の研修システムに乏しい

- ・「校内的な部分と教育センターで研修している部分とあります。県がやっている教育センターのほうでは、専門研修だとか職能研修とかになります。校内では校内研究授業というのを年に何回かやります。」
- ・「研究授業のほうは当然やっています。それほど多い数ではないです。先生方の授業に対する子どもたちの評価をアンケートで取ってるんです。親たちの評価、学校に対する評価、それから子どもたちの普段の教科の先生に対する評価、出してるんです。それをもとにして先生方も考えて授業等々やったもらいたいってあるんです。」

- 校長のリーダーシップは比較的弱い傾向にある

### 6.3.8 中学校4群

- 校区は多様であり、特に一貫した特徴は認められない
- 家庭環境の多様性が他の群よりも高めである
- 地域との関連において、特徴のある活動をしていない学校も中にはある

- ・「カバンの中に何にも入っていない、ノートと鉛筆もってこい、といっても「はあい」というような感じで、親に話しても学校行くだけいいでしょと（後略）。」
- ・「保護者のアンケートで、家庭学習の習慣がつかないのは学校の努力が足りないからだって書いてありました。それは親の責任だと思いますけど、そういうところまでちゃんとこう、全部ケアしろという親の要求はあるんです。」
- ・「(地域との協力に関して) あんまりないです。教えるっていう面に関しては。殆どボランティアは入っていないです。茶道部の指導員とかそういう形で入りますが。」

- 学習（家庭学習、習熟度別少人数学習、補充・発展学習）の改善や新しい教育方法への姿勢に関しては、前向きではない

#### (学習状況)

- ・「ただ若干何名か配慮を要する生徒がおりますので、それに引きずられないように注意しています。」
- ・「(今年) 学習の手引きを作った。ここ数年そういうのを作ったことがなかったんです。だから継続的になんかしてたかって言われるとしてないになると思うんです。」
- ・「うちの逆の課題なんですよ、教員の緊張感がなくなってきて、もしかしたら荒れるかもしれないところがあるわけですよ、見えてないからみんなこう気が緩んでいるんで、いつも私たちが言うのは気を緩めるなど。」
- ・「基礎がちゃんとできてない子もいるんです。それをどうして引っ張っていくのが非常に大きな課題（中略）何回教えても分かんないって、補習して、分かったねって言って帰って翌日になるともう忘れてる。厳しいですね」

#### (習熟度別・少人数)

- ・「公立の学校ですので、子どもの幅が大変広い。その中で習熟度別編成でいけば、教師の数も足りませんし、いま加配を頂いて数学なり英語なりは2人でやっていますけど、その中で明確に習熟度別というのではないけども、分からない生徒には付き添って教えると、そういう中で何とか引き上げを図っていこうかな、ということくらいしかできない。」
- ・「うちも実は習熟度別学習、やったことがあったんですけど、部屋が確保できないし、親からも高い評価を頂けなくて、TTに戻しております。」

(発展・補充)

- ・「(発展・補充学習に関して) うちには意図的に努力している教員は今のところいません。ごく僅かにそういうことをやってらっしゃる先生もいますが、全体を通して、カリキュラムの中でっていうのは難しですね。」
- ・「学習相談というのを行っています。放課後希望者が残って先生がその希望者を5人か10人集めて、テスト期間中1週間前にやるんです。」
- ・「選択授業の中で行っています。選択授業は、コースをたくさん作ってレベルに応じてやっているのですが、これが通常の授業だけだったら、私はきついんですね。」

- 教員研修に関しても、しっかりとした計画に基づいた実施が見られない

- ・「うちの課題のようなものを出して、時には生徒指導の研修をしたり、人権教育の研修をしたりしている。」
- ・「うちの学校では、基本的には授業、指導案をきちっと書いて管理者が見るっていうのを1年に1回は必ずやろうということはやっています。」

- 校長のリーダーシップに関して、消極的な姿勢が目立つ

## 7. 成果と今後の課題

### 7.1 質問紙調査に基づく類型化

小学校・中学校の学校質問紙調査項目(小学校;80項目,中学校78項目)への全実施校の反応を基に、類型化を試みた結果、4群の分類が最も解釈しやすい類型であることがわかった。各質問項目群,学力調査の結果を検討し、実際に存在する各群を代表する学校に対して聞き取り調査を行うことにより、類型の特徴の解釈を試みた。

聞き取り調査の結果より、小学校と中学校において各群の特徴は同様であると推察された。すなわち、1群は地域や家庭、学校資源を含めた環境に恵まれた学校であり、それに加えて緻密な学校運営がなされている実像が浮かび上がってくる。2群は、必ずしもすべての環境が恵まれているわけではない。厳しい状況もあるが、その厳しさを学校の努力によって克服している群といえる。そのため、校長の強いリーダーシップを背景にした独自の学校運営が実践されている。また、中学校になると、その学校運営の成果が、学力の伸長へと傾きがちであることも推察された。3群は、地域や家庭、学校資源を含めた環境に恵まれていない学校であり、そのために学校として試行錯誤しながら学校運営を行っている群と考えられる。4群は、何らかの課題を学校側が抱えており、より一層の努力が必要と考えられる学校である。今回の聞き取り調査により、その課題は一つの事柄に収斂されるものではなく、学校によって様々に異なることが予想された。結果的に、学校運営自体が非常に消極的になっているという特徴が挙げられる。

以上のことから、1群は【適応型】、2群は【個性型】、3群は【努力型】、4群は【要改善型】の学校群であると言える(各群の特徴のまとめは次ページの図4参照)。



### **1群【適応型】**

- ◆ 校区は、主として文教地区や人口移動の少ない住宅地であり非常に恵まれている地域といえる
- ◆ 家庭を含む地域との連携が非常に密に行われている
- ◆ 学習（家庭学習、習熟度別少人数学習、補充・発展学習）に関しては、きめ細やかな教育実践が行われており、かつそれらの完成度が非常に高い
- ◆ 教員の研修に関して、学校独自の考え方とプログラムを有している
- ◆ 校長のリーダーシップは率先垂範型で非常に強く発揮されている

### **2群【個性型】**

- ◆ 校区は、必ずしも恵まれた環境であるとはいえず、かなり複雑な問題を抱えている校区だが、学校の創意工夫によりそれを克服している
- ◆ 家庭を含む地域との連携は"非常に密である"とは言い難いが、ある程度の連携は認められる
- ◆ 学習（家庭学習、習熟度別少人数学習、補充・発展学習）に関しては、独自の教育理論とそれに基づいた教育実践が行われている。また、習熟度別少人数学習に関しては、明確な理念のもと、独自の取り組みがなされている
- ◆ 教員研修に関しては、緻密な研修計画が実施されている
- ◆ 校長は"校長のリーダーシップ"に関して、明確な考えを持ち、学校内において非常に強く発揮されている

### **3群【努力型】**

- ◆ 校区は、様々な家庭環境の家庭がある地域といえる
- ◆ 家庭との連携に課題が見られるが地域との連携は市の支援を受けて行うように努力している
- ◆ 学習（家庭学習、習熟度別少人数学習、補充・発展学習）においては、市教育委員会の支援を活用した形での実施が見られる
- ◆ 教員研修に関しては、一部の学校を除いては教育委員会の研修プログラムに基づく研修を実施しており、学校独自の研修システムに乏しい
- ◆ 校長のリーダーシップは比較的弱い傾向にある

### **4群【要改善型】**

- ◆ 校区は多様であり、特に一貫した特徴は認められない
- ◆ 家庭環境の多様性が他の群よりも高めである
- ◆ 地域との関連において、特徴のある活動をしていない学校も中にはある
- ◆ 学習（家庭学習、習熟度別少人数学習、補充・発展学習）の改善や新しい教育方法への姿勢に関しては、積極性にやや欠ける
- ◆ 教員研修に関しては、しっかりとした計画に基づいた実施が見られない
- ◆ 校長のリーダーシップに関して、消極的な姿勢が目立つ

図4 類型の特徴のまとめ

## 7.2 学校類型と学力との関連

非階層的クラスタ分析によって明らかにされた学校の4つの類型と学力調査の結果との関連を検討した結果、4つの類型と学力との間に関連が見られることが明らかとなった。この結果より、地域・家庭との連携も含めた学校経営が、子どもたちの学力に影響を及ぼしているということが示唆できる。特に中学校においては、その影響がより顕著に表れてくることが明らかとなった。

## 7.3 第4群の学校研究の必要性

本研究では、質問紙項目を用いた計量分析と訪問調査の両方を用いて、学校経営の観点から4つに分類される学校群の特徴を浮かび上がらせた。我々の学校類型化の研究によって浮かび上がった第4群の学校は、学校としての機能を十分に果たしきれないでいるように推察される。これらの学校を再生することは、現在問題とされている学校教育の問題解決に一步近づくことになる。第4群の学校の課題に取り組む研究、学校再生の試みが重要となる。そのためには、個々の学校特有の課題や学校改善の取組事例を収集することが有効であると考えられる。そのためには本研究のように、計量的な方法で類似した特徴を持つ学校を選定し、サンプリングした学校への訪問調査を行う手法を用いることで、質的な情報を加味し効率的に参考となる事例を収集することができると思う。